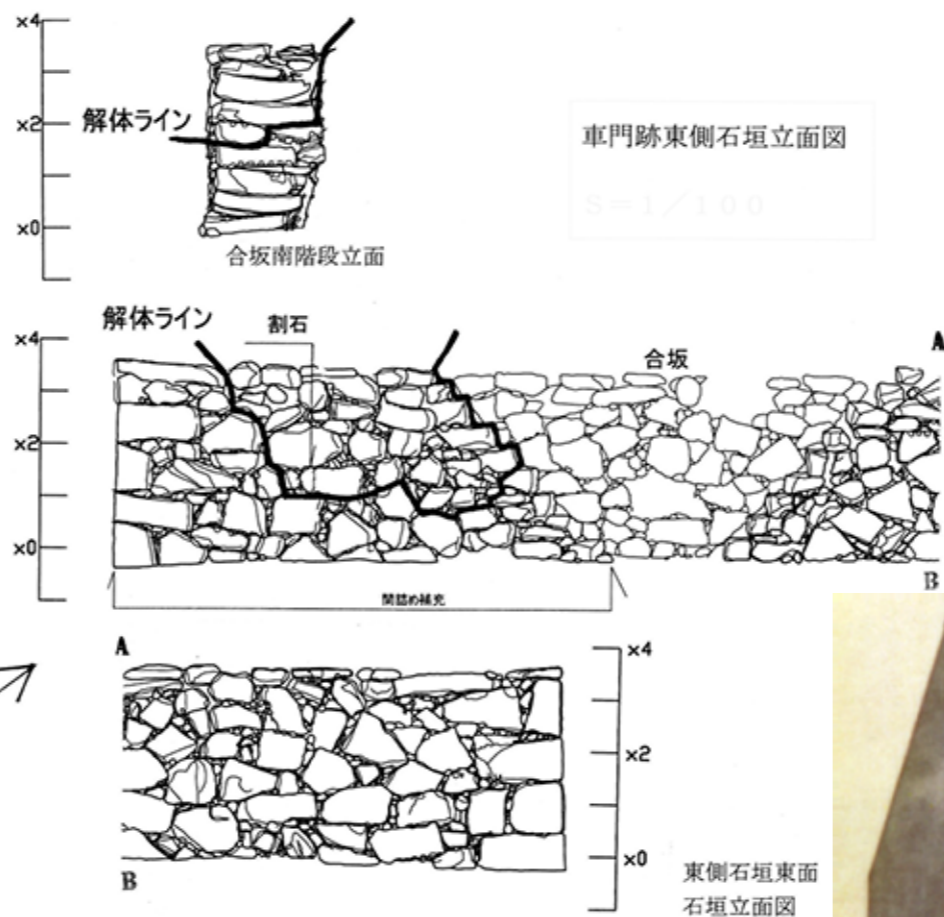
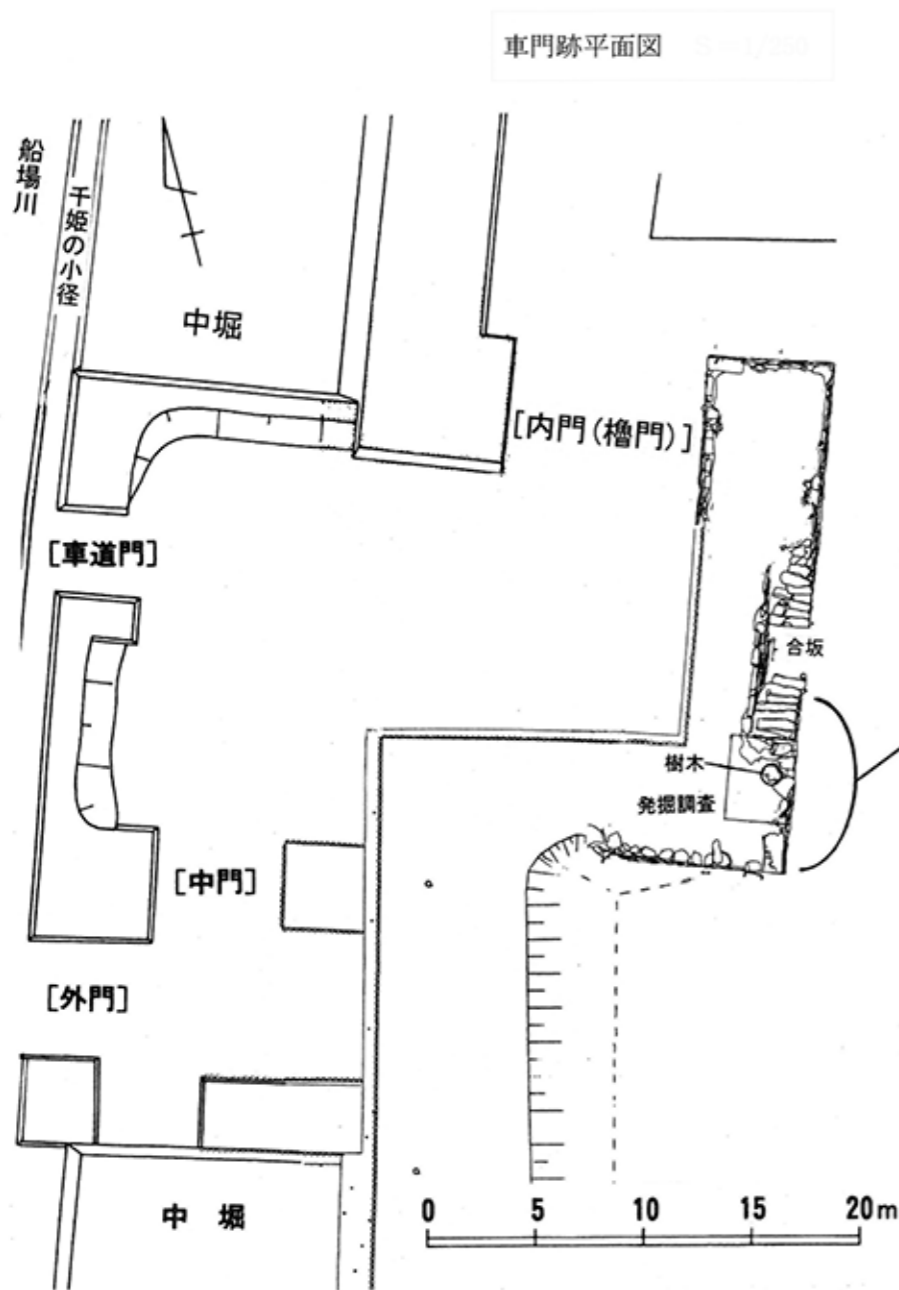


車門跡の石垣

石垣修理工事に伴う現地説明から



石垣は、17世紀初頭に池田輝政が築城したときに造られたものと推定されます。築かれてから、およそ400年が経過し、内門東側の石垣において、樹木の根の影響による石垣の孕みが生じていました。

城郭研究室では、石垣の崩壊を防ぐため、解体して積み直します。

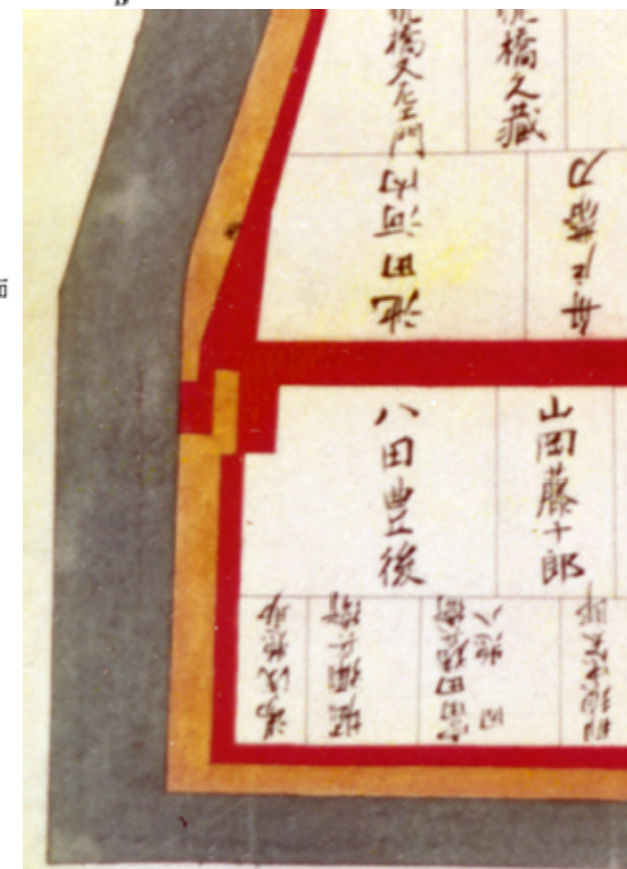
2 解体調査の成果

石垣には中曲輪としては大きな石材が使われています。ただ、解体してみると奥行きが短いものが含まれていました。また、上の石が乗るところが尖って斜めになるなど、不安定な石材も使われています。そのほか、通常は幅と長さの揃った石を使用する石階段部分でも、不揃いな石材を組み合わせて使用しています。裏込め(うらごめ)の栗石(ぐりいし)の幅は約1mでした。

これは、池田輝政による大規模な築城のためには、大量の石を集める必要があり、このような石材も使ったとみられます。天守など城の中核部の石材は、比較的形の良いものですので、場所ごとに石材のランクを使い分けた可能性もあります。ただ、その中で石垣は400年間維持されており、そこに当時の石積み技能者の苦心と工夫を見ることができます。

3 修理工事の概要

- ①工事期間 平成24年(2012)11月7日から翌年2月末頃
- ②工事面積 解体範囲の立面積10平方メートル
- ③工事内容 石垣の孕みの生じた部分を解体し、年月の経過による石材のズレなどを補正して築城当時の勾配に積み直します。石材の割れなどで再利用不可能な石は、形状の記録を作成した後で同質の石材に取替えます。



←池田時代の絵図(写本)に描かれた車門の枡形。大まかには現存する門跡の構造だが、三つの門で構成されていたかどうかは、この絵図ではわからない。

1 車門跡石垣の概要

車門(くるまもん)跡は、特別史跡姫路城跡の西側に位置します。中曲輪(なかぐるわ)から船場(せんば)川を渡り城外へ出るための門で、枡形と呼ばれる構造です。通常の枡形は二つの門を組み合わせますが、車門は三つの門で構成しており、別に船場川へ出る水門もありました。中曲輪の門の構造としては最も厳重で、西国へ軍事的に備える出入口として中心的な役割を担っていたとみられます。